の顔を見ると、こちらを見てウンウン、とうなずいていました。私がウッとくる涙をこらえて名前を呼ぶと、しっかりとした返事をしてステージに上がり、卒園証書を受け取ることができました。卒園児全員でのシュプレヒコールも歌も覚えて、大きな口を開けて歌う姿に、私は涙をこらえるのが大変でした。

お母さんが、「先生の言葉、やっとわかりました」と

入学式の翌日、母子でランドセル姿を見せにきてくれました。お母さんからは、以前のような無機質な感じはなくなり、入学を心から喜んでいるようでした。入学にあたってお父さんが関係する機関に働きかけ、小学校や教育委員会と情報交換をして、地域の学区の小学校に入学することができました。私も、お母さんとMくんと一緒に小学校に出向き、支援会議を開いてもらうなど、できる限りサポートしました。

学校からは、登下校の際の保護者の付き添いを勧められました。最初は渋るお母さんに、私からも小学校の様子を聞けるからそうしたほうがいいと伝えました。実際、支援学級のMくんは出入り口もほかの児童とは違う場所だったようで、このことも含め、「Mはこれでいいんだ、これが現実です！　先生ありがとうございました！」と、初めてMくんを認める言葉を聞くことができました。

いつか、バスの中から手を振るよ！

我が子への願いは、もっともっと…と欲張りになります。でも、目の前の我が子に向き合わなければ未来にはつながらないことを、何度も伝えてきました。ランドセル姿を見せてくれたとき、お母さんが、「先生の言葉がやっと理解できました」と言ってくれました。ふだんなら保護者から求められて撮影に応じるのですが、このときばかりは「写真撮らせてください！」と私のほうからお願いしてしまいました。

Mくんが通う小学校のすぐ前を、私が乗る園バスが通ります。いつかMくんがお母さんと登下校している姿を見かけたら、バスの中から手を振ろうと、今から楽しみにしています。

実践報告

まちをつくっちゃおうプロジェクト ぶどうレインボータウン2018

神奈川県川崎市　株式会社ぶどうの木運営の6保育園の試み

まとめ…ぶどうの木「つながり隊リーダー」・ぶどうの実久地園保育士　上垣内 杏美

↓つながり隊集合写真

年長児への問いかけから始まった

「まちをつくっちゃおうプロジェクト」は、神奈川県川崎市で株式会社ぶどうの木が運営する6園の保育園の年長児と学童が、5カ月かけて取り組んだプロジェクト保育です。

これは保育士と子どもたちがたくさんの「対話」を積み重ねて紡いできた保育の実践です。主体的・対話的で深い学びを通して、自ら希望を切り拓き、ひとと共生し、ひとの役に立つひとに育ってほしいという私たちぶどうの木の願いを込めた取り組みでもありました。

6園の年長児45名への「役に立つって？」という問いかけから始まったプロジェクト保育の集大成として、2018年11月3日に川崎市民プラザと隣接するぶどうの実梶ヶ谷園を舞台に、「人口800人の」ぶどうレインボータウンというまちが誕生したのです。

「役に立つ」って？

「役に立つって？」という問いかけから、私と子どもたちの物語が動き始めました。

子どもたちからは、「給食の前に机をふくこと」「困って泣いている子がいたら助けてあげること」「パパやママのお手伝いをすること」など、自分自身がやっている身近なことがたくさん挙がってきました。

自分の中に、誰かの役に立つ自分がいること、自分の心の中に思いやりの気持ちがあることなどに気づき、発見することで、自己効力感を実感していきました。

役に立つことの意味を肯定的な感情としてつかみ出した子どもたちは、『ぼくのまちをつくろう！』という1冊の本に出合います。この本を通して、「まちって、なんだろう？」という学びが始まりました。

子どもたちが出合った『ぼくのまちをつくろう！』という絵本。（スギヤマカナヨ／理論社）

まちって、なんだろう？

子どもたちは自分が住んでいるまちの地図をつくりながら探索していきます。さらに想像を広げて、まちのイメージを膨らませながら、仲間とさまざまな気づきや発見を共有していきました。

病気になったときは病院に行きたいから、お医者さん。ご飯を食べるには買い物に行って材料を買わなくちゃいけないから、スーパーマーケット。困ったら助けてほしいから警察署も欲しい、など。

こうして子どもたちは、まちで自分たちがハッピーに住むために、必要なもの、欲しいものという視点で、いろいろな仕事があることを発見していきました。

まちには、働いている多くのひとたちがいる。まちで安心して生活できているのは、ひとりひとりが互いに助けられたり、支えられたりしているからだと気づいていきました。「そうだ！　まちは、働くひとでできている！」。

こうして、子どもたちと学んだことを立ち止まっては、その都度ふりかえって、「まちって、なんだろう」という学びや探索を深めていきました。

もしも、自分が働くとしたら？

「もしも、自分がまちで働くとしたらどんな仕事がしたい？」と、ある日の対話で子どもたちへ問いかけました。

まちについて考えるサークルタイム。

子どもたちは自分たちが働くことをあまり想像していなかったようで、最初、少し首をかしげながら考えていました。

それでも、「かっこいいから、おまわりさん」「あこがれだから、アイドル」「役に立つから、お医者さん」「宅配便の人」など、自分の経験や興味関心から、たくさんの仕事や職業が出てきました。

自分たちのまちをつくろう！

9月のある日、ぶどうの木6園の年長児が、「つながり隊」として川崎市民プラザに集合しました。

どんな仕事があるのかを調べる。

小学校高学年の学童から、この場所に自分たちが住民になって、自分たちのまちをつくろうと提案がありました。まちの名前は「ぶどうレインボータウン」。このまちの住民になるには、役に立つことをするか、働くことが条件でした。

それぞれの園で、役に立つこと、まちって？　働くって？　と学び、考え合ってきた流れもあり、子どもたちは大賛成。この日から、自分たちのまち「ぶどうレインボータウン」の住民として、どんな仕事をするのかを自分で考えて決めるための、本格的な取り組みが始まりました。

ぶどうレインボータウンで自分はこの仕事をすると決めるために、興味のある仕事を思いつくままに挙げたり、仕事の内容を調べたりしていきます。どうしてその仕事がしたいのか、私は子どもたちと対話を深めていきます。漠然としてあいまいだった「やりたい」が、少しずつ明確になって具体的なものになっていきます。

ぶどうレインボータウンでは火を使うことはできない、医者の仕事は病気やけがをしている人がいないとやることがない、など現実的な課題にも気づき始めます。

自分が興味のある仕事について調べる。

子どもたちは自分と向き合いながら、自分のやりたいことの深い理由や思いにも気づいていきます。「おもしろそうだ」「かっこいい」など自分の中の動機から、「みんなを喜ばせたい」「笑顔にしたい」「しあわせな気持ちで帰ってもらいたい」という誰かのために、という気持ちがあることにも気づいていきます。そして自分の中の動機や気持ちをベースに、自分で選択し、仕事を決めていきました。

Aちゃんはクッキー屋さん

「お店屋さん」がやりたいというAちゃん。「何のお店？」と聞くと「食べ物を売りたい」。さらに話していくと、「お金を渡したり、もらったりするレジがやりたい」という話が出てきました。クッキー屋さんをやりたい友だちがいることを話すと、「一緒にやってみたい」と。こうして、調理したい子、接客をしたい子、レジをやりたい子が集まり、クッキー屋さんが生まれました。当日までにやることを確認したり、分担したりして、計画を立てて準備を進めていきました。

Aちゃんはレジに必要なお金のやり取りを学んでいきます。おつりの計算の仕方を繰り返し練習しました。

本物のおまわりさんに会ったOくん。

当日の「おまわりさん」たちの写真。

Oくんはおまわりさん

Oくんは「まちを守りたい！」と意欲的。「なぜ？」と聞くと、「かっこいいから」。「どのように守りたいの？」と聞くと「悪いひとから守りたい」。「なるほど、おまわりさんになりたいのね」と言うと、目を輝かせて大きくうなずくOくん。

園を超えて、8人の子どもたちがおまわりさんの仕事を選びました。

私たちは警察署に依頼をし、おまわりさんが悪いひとを見つけたときには、どんな道具を使い対応したりしているのかを、直接子どもたちに見せてもらいました。

本物のおまわりさんに具体的な対応の仕方を学べたことで、子どもたちはおまわりさんとしてのふるまいや仕事の内容をリアルに実感できました。

ぶどうレインボータウンオープン！

11月3日、学童の「町長」がテープカットして、ぶどうレインボータウンのオープン！

訪問者には、役場で日本円からぶどうの木の地域通貨「グーレ」に両替をしてから、町に入ってもらいました。お客さんである保護者には、子どもたちの接客や対応に時間がかかっても、ミスがあっても、決して手を出したり、口を出したりしないで、見守ってほしいとお願いしました。

子どもたちは、住民登録カードを胸に、自分のやるべき仕事に集中していました。保育室でのごっこ遊びでは見せることのない表情と真剣さで、働く自覚と責任が伝わってきました。

→ぶどうレインボータウンの入り口。

↓せっけん屋で地域通貨「グーレ」を使って販売。

どの子も表情は晴れやか

ぶどうレインボータウンでの仕事をなし終えた子どもたち一人ひとりと、面談をして振り返りをしました。

「楽しかった、うれしかった」とストレートに充実して満足という感想もあれば、「お客さんがいっぱい来て、ずっと働くのは忙しかったので大変だった」と率直な気持ち、具体的なエピソードもたくさん出てきました。

どの子どもたちも表情は晴れやかでした。自分で決めたことだし、最後まで頑張りたいと思っていたから、やめたいと思ったことはなかったよ。お客さんにありがとうと言われたことがうれしかったしね。この振り返りは、子どもたちの共通した感想と思いでした。

自分の〝しあわせの実〟を発表する子どもたち。

ハートのカードのしあわせの木

子どもたちは、うれしかったことや頑張ったことをハートのカードに書き出し、大きなしあわせの木として掲示しました。しあわせの木を見ながら、一人ひとりが違う経験をしたことを、みんなでシェアしました。互いの頑張りを認め合い、エールを送り合っていくことで、達成感と充実感は深まっていきました。

5カ月という時間をかけたプロジェクト保育を通して、私は子どもたちとことん対話を通して向き合ってきました。子どもたちが主体的にそれぞれの自分の「やりたい」を探しながら、考え、学び、気づき、発見して、この仕事をやると自分で選択し決定していくことに寄り添ってきました。

子どもたちとの学びと育ちの物語を歩むなかで、自分で選んで決めたことだから、あきらめずにやり切ろう、だから頑張れたという誇らしい自信と責任が芽生え、意思を貫く強さが育ってきたことを、私はたくましく感じることができました。

また、子どもたちは各園での取り組みだけでなく、6園の年長児のつながり隊活動を通して、多くの大人や仲間と出会い、ともに協働してプロジェクトをやり遂げてきました。ひとととともに協力し、分かち合い、信頼し合うという経験は大きな喜びになったと思います。

「やればできる自分」という自己効力感と自己肯定感、ひとととひとがつながる関係の中で自分は生きている、生かされているという共同体感覚は、シアワセな未来を創るひとになるための生きる力の土台になる、と私は信じています。

→振り返りを通して完成したしあわせの木。

↓振り返り後の子どもたち。

写真提供…ぶどうの木